

3 CTで捻転部位が描出された胆嚢捻転症の1例

海津 元樹*・佐藤 敏輝(長岡中央総合病院)
 塚田 博・根本 健夫(放射線科)
 大竹 雅広・坂田 純(同 外科)
 五十嵐俊彦(新潟県厚生連病理
 センター病理)
 金井 朋行(金井医院)
 (*現 新潟県立がんセンター新潟病院放射線科)

胆嚢捻転症は、先天的な肝床部と胆嚢との付着不全による浮遊胆嚢の状態に外的な誘因が加わり、頸部で胆嚢が捻転する比較的希な疾患である。その特異的な病態から手術所見による診断は容易であるが、術前診断は困難であり、急性胆嚢炎と誤診されることが多く、その正診率は約20%程度である。

今回我々は、CTで胆嚢捻転頸部が描出され、この特徴的な所見により、胆嚢捻転症の術前診断が可能であった症例を経験した。

症例は70歳の女性。下腹部痛を主訴に近医から急性虫垂炎の疑いにて当院受診。腹部超音波では、下腹部に結石を伴った嚢胞性病変を認め、卵巣嚢腫の捻転を疑った。同日施行の腹部CT検査では肝胆嚢窩に胆嚢が描出されておらず、同部位より尾側からみて時計方向へ捻れる渦巻き状の構造が、この病変の頭側に連続して描出されたため、胆嚢捻転症と診断した。CTがこの疾患の有力な診断根拠となりえたのでここに報告した。

4 呼吸器疾患に合併した腹腔内 free air

斎藤 友雄・奥泉 謙
 前田 春男・黒川 茂樹(新潟市民病院)
 横山 道夫(放射線科)
 原口通比古(同 内科)
 鳥越 司(新潟大学医学部)
 6年生

0歳女(低出生体重児, RDS, 人工呼吸, 気胸, 縦隔・皮下気腫), 80歳女(気管支喘息), 77歳男(慢性肺気腫)の3例を提示し、呼吸器疾患に気腹を合併する理由を考察した。ラットに挿管し高圧をかけると気胸を起こすが、これが後腹膜腔に移行し、腹膜が破裂することで気腹を起こすことが実験的に確かめられている。一方、気胸・気縦隔

を伴わない特発性気腹症が知られているが、剖検所見から肺の perivascular sheath からリンパ管を逆行して、腹腔内に空気が移行するという機序も示唆されている。いずれにせよ、これらの報告例は殆どが新生児と老人に限られており、結合織の未発達や変性(老化)が気腹の形成に関与していると推測される。

5 放射線治療後にみられた皮質骨亀裂所見

勝良 剛詞・伊藤 寿介
 林 孝文・小林富貴子
 益子 典子・小山 純市(新潟大学歯学部)
 平 周三・中島 俊一(歯科放射線学講座)

【目的】口腔癌放射線治療患者にみられた皮質骨亀裂所見の意義の考察。

【対象】1993年1月から1998年12月の間に本学放射線科にて放射線治療された頭頸部悪性腫瘍61症例のうち当科にてCTで1年以上経過観察された31症例を対象とした。

【方法】CTにて皮質骨に平行に走行する線状の骨濃度の消失が出現したとき皮質の亀裂ありと定義した。亀裂を認めた症例をCTで亀裂部位、周囲解剖構造との関係、出現前後の周囲の骨変化について評価し、それに臨床的所見として原発部位、照射法、線量、照射から出現までの期間、手術法、放射線骨壊死(以下骨壊死)の有無について検討を加えた。

【結果】放射線治療後に皮質骨亀裂所見のみられたものは8症例であり、原発部位は舌又は口底、術後照射6例、組織内照射が2例、亀裂部位の線量は組織内照射併用例は亀裂部位の線量は不明であったが外照射症例は50 Gyもしくは60 Gyであった。照射から亀裂出現までの期間は6-31ヶ月、平均17.3ヶ月であった。手術侵襲と関連している症例が多かった。亀裂部位はすべて下顎舌側皮質骨の筋付着部位であり、大部分は亀裂出現前に若干の骨硬化像の出現があった。観察期間は短いが亀裂出現後に骨壊死を生じた症例は2例のみであった。

【結論】亀裂出現部位は手術操作された筋の筋付着部が多く照射野内であることから放射線治療後の皮質骨亀裂所見は放射線治療や手術による血